

第2回 兵庫県立神出学園・兵庫県立山の学校の機能充実に向けたあり方検討委員会 議事録

1 日 時 令和7年12月15日（月）10:00～12:00

2 場 所 神戸市教育会館4階 404会議室

3 出席者

新井肇委員長、秋光恵子委員、喜多和美委員、辻登志雄委員、中尾志都委員、西田勉委員、前阪一彰委員、三谷治委員、吉田利徳委員、水川男女青少年課長、奥本同副課長 他

4 内 容

(1) 開会

(2) 議事

ア 会議の運営について

- ・委員会の会議は、個人情報に関する事項等を除き原則として公開することを決定
- ・1名傍聴される旨の報告

イ 施設の現状・課題について

- (ア) 概要説明
(イ) 意見発表
(ウ) 意見交換
- 内容以下のとおり

(3) 閉会

【議事要旨】

(事務局)

第1回委員会では、神出学園・山の学校の現状・課題について、事務局・各施設から説明し、頂いた意見については、資料1にまとめて配付させて頂いている。

本日は、前回の議論を踏まえ、施設の意義・必要性に絞って議論を頂きたい。

不登校・ひきこもり等が増加する中で、県が行うべき支援は何なのか。神出学園・山の学校での支援をどう位置づけるのか、施設の意義・必要性について改めて掘り下げて議論頂きたいと考えている。

前提として、施設の存続ありきで議論を進める意向ではないので、「役割を終えた」や「施設の意義必要性は認められない」といった意見も頂きたいと考えている。

本日の議論を踏まえ、県において、施設の今後のあり方について内部で協議を行い、次の第3回委員会では、県としての考え方を示し、さらに議論をお願いしたいと考えている。

(委員)

続いて、委員の皆様のそれぞれの専門の立場に立って、施設の必要性・意義について意見を頂きたい。

まず、資料を頂いた委員から順に意見発表を頂きたい。

(委員)

〈資料 2－1 について説明〉

なお、神出学園・山の学校は、発達課題を一からやり直すことのできる唯一無二の存在だと感じる。小さい頃に経験しておくべきこと、あるいは愛着の形成にとって必要なこと、そういうものが欠落していたり、あるいは小中学校時代に本来経験すべきことが抜け落ちたりしてしまっている。この経験を民間の企業・団体がカバーしようとしても、時間的にも人材的にも、また物理的にも非常に難しい。

また、多くのフリースクールは、保護者や子供のニーズに応えるために居心地の良い場所を提供しているが、無責任に提供していると感じる。保護者や子供のニーズに応えるばかりで人間の成長にとって必要な経験を提供できていない。しかし、経験の提供に重点を置きすぎると子供が集まらず運営が厳しくなるため、表面的なニーズに対し居心地の良い場所の提供ということになり、教育的な効果は薄い。

私が一番伝えたいことは、「青少年の孤立を防いで、安心できる居場所と時間をどう保障するのか」という点。特に安心できる居場所とは、物理的な居場所と心理的な居場所の二つの側面を持っている。時間というのは、「待ち時間」と言い換えることができる。SNS 等のネットが氾濫している中で、大人もそうだが子供たちの待ち時間が奪われてしまっている。

昔であれば信号を待っている時間とか電車の中にいる時間、病院に行って診察を待つ時間、そういう待ち時間はスマホとか見るのはなく、自分を振り返るなど内省をする時間として使われていたが、今はその時間が SNS 等に支配されてしまっている。子供たちにはそういう人生の待ち時間と物理的、心理的な居場所を与える。

これはやはり民間の財力・仕組みでは対応ができない部分で、両施設によって本来育まれるべきであった愛着を子供たちの中に育んでいければ良いと思う。

(委員)

次の発表をお願いしたい。

(委員)

〈資料 2－2 について説明〉

(委員)

神出学園の修了生の声の動画を用意しているので、共有したい。

〈神出学園創立 30 周年記念式典の記念シンポジウムの様子を約 10 分間映写〉

(委員)

次の発表をお願いしたい。

(委員)

〈資料2－3について説明〉

(委員)

提出頂いた資料に基づいて3人の委員より意見発表頂いた。

先ほどの3人の方の発表について、質問あるいは意見等があれば出して欲しい。

(委員)

先日、神出学園・山の学校に見学に行った。教育という点において、十分な知識はないが、学校の設立経緯を踏まえ、学校の現状を見た感想をお伝えしたい。

山の学校と神出学園は、それぞれ設立経緯が違うということもあり、独自の特色がある。山の学校は、自然とのふれあいやボランティアに行くなど、いろいろな体験をされている。問題行動のある生徒の教育には最適なプログラムだと思う。

一方、神出学園は、ひきこもりやオーバードーズの生徒もいることもあり、手厚くケアをされている。

両施設の生徒は、どこに問題があるのかわからないぐらい生き生きとしている。山の学校の生徒は、元気で挨拶もしっかりできる。普通の学校の生徒よりも明るく生活している。

神出学園の校歌を歌う様子を見ていると、参加している全員が歌を歌っている。小中学校でも2・3人は歌っていないと思う。神出学園の生徒は、自分の居場所を見つけて自尊心を持ちながら生活できている。両施設の生徒にとってステップアップにつながる場所。

両施設の素晴らしいことは理解できるが、その中で人數的にひきこもりがこれだけたくさんいる世の中で、このような恩恵を受けることができる人がごく僅かであり、もっと広げた方が良い。1人あたりは相当な金額がかかるが、将来的に見れば税金や社会保障の点で社会に還元される。もっと多くの人にこの環境を経験して欲しい。間口を広げるために、中学・高校など入学時期が決まっているので、中学3年で紹介してもらえることができれば良いが、高校に入ってからやっぱり高校に合わないとなったときにスムーズに両施設に移行できるような体制ができれば良い。保護者の中には、高卒資格が取れない両施設に1年または2年通わせることに抵抗がある方もいると思う。そこで、寮生活・入学期間を柔軟に設定し、対応することができればと思う。短期間利用し、在籍している学校へ戻ることができる仕組みを整えることで、より多くの利用者を見込むことができるのではないか。

また、出口戦略について、高校進学や就職に繋がりやすくするために、単位を取得しやすくすることやインターンを充実することでより魅力的な施設になる。

(委員)

今年、不登校の高校生が山の学校を訪れ、次年度本校への入学に興味を示したが、結局

元にいた学校に通いだすことができるようになった。

本校に1年間はいなくても、例えば3ヶ月など短期間入学し、元いた学校に帰る。このようなシステムが整えば非常に教育的効果は大きい。県の教育委員会には、山の学校に入学している期間は出席扱いにして欲しい。高校の場合は、小中学校と違い履修と修得がある。例えば、数学の授業を受けるだけでは単位はもらえない。数学の授業を、履修が認められた上で、評価を受けて修得する必要がある。山の学校に入学している期間は、全寮制を加味した出席扱いの制度を整え、元いた学校に帰りやすいようなシステム作りをして欲しい。

(委員)

民間のフリースクールを経営している立場から、公立の神出学園や山の学校の意義を褒め称えて頂いたが、一方で民間のフリースクールと比べて、こういうところがでてきてない、民間の方が優れている点があれば教えて欲しい。

また、神出学園では、民間のフリースクールに通うことができなかつた方が来られていることだが、どういう点で、民間のフリースクールには対応できなかつたのか。

(委員)

民間のフリースクールは、多種多様に別れているので、一般論として言うのはなかなか難しいのが、私が関わっている通信制高校技能連携校でも、神出学園・山の学校の活動を参考にしている部分は多い。例えば、山の学校の自然活動など。

宿泊施設はないが、長時間にわたる共同生活の場の提供も行っている。

山の学校での履修の話がでていたが、我々の学校に関しても3年間通うと単位が修得でき、履修が認められて卒業にいたる。ただ、その履修の方法に工夫をしている。必修科目である英語、数学、国語は履修をすれば良いということにしている。つまり、最終的に単位は取れなくても構わない。単位は、別の科目、例えばアイススケートとか、スキーの授業があり、実際必要な単位はそのような科目で取得し、卒業に導くという柔軟な対応をしている。アルファベットの認識ができない、足し算引き算ができないという学習障害を持つ子供たちが多く通っているため、いったん履修はさせるけれども、苦手な科目は無理やり単位を取らせるのではなく、その他のことできることで単位を取らせる。

神出学園・山の学校の入学を考える方も、出口の部分、つまり高卒資格を取得できるのかといった点は、どうしても避けて通れない問題。

私が関わっている学校と比較すると、単位修得や学習面において、やや気になる点がある。

(委員)

民間のフリースクールに通っていた学園生で、継続が難しくなり、移ってきた生徒は数名いる。理由は、非常にこだわりが強く、愛着障害のような形で指導してくれる教員や担当の人について回り、ずっとその人に話しかけ、その子の相手ばかりできないので、手に負えなくなる。また、突然大きな声を出し、怒り、物に当たって壊すことがあると、民間フリース

クールでは難しいとなる。

あとは学習面で、履修をすれば単位がもらえるというシステムであったとしてもその履修自体が難しい。同じ場所にずっといられない、気分と体調の波が激しく、調子がいい時はいいが、悪くなると、気が乗らず参加できず、この状態のままでは厳しいと言われる生徒もいた。

また、保護者が子供と離れて生活せざるを得ないようなケースでは、児童養護施設等がその保護者の代わりをしてくれるが、そのような状況では民間フリースクールでは対応が難しいと言われる。

(委員)

資料3について、事務局より説明をお願いしたい。

(事務局)

〈資料3について説明〉

(委員)

10、20年前までは、資料3のような、独自性を持ちそれぞれの社会的な課題に取り組んでいる、教育的な効果を考えているフリースクールが多くあった。しかし、多くの良心的な運営をしているところほど、財政難や後継者の不足で規模の縮小、あるいは廃止の傾向にあるように思う。その反面、全国規模で展開されているところが市場を席巻しつつある。こういった報告を見ていると、本来の国や公的なところがやるべきところを民間に委ねて、「民間の方がうまく運営し、軌道に乗っている」と表現されるのはいかがなものか。本来は、公的なところでやるべきことを民間がその隙間を縫って行っており、民間の良心的なところほど、非常に運営が困難であることはご承知おき頂きたい。我々の法人が運営する学校は、今年度で募集を停止した。非常に信念を持ってやってきたが、今年の入学生が4名でこのままでは運営できない。公的な支援があればうまく運営できていたかもしれないが。

(委員)

先程、委員が運営に携わる学校で実施している履修・単位修得の工夫は、非常に柔軟性の高い教育課程を構築されていると感じた。そのような学校でも募集停止となる。全国規模で展開されているフリースクール等が生徒数を伸ばしているという状況であるが、そのようなところはもっと柔軟な教育課程を構築しているのか。

(委員)

私の頭の中に思い描いている団体は、全国展開をされており、登録者数が10万人に届こうとしているところを想定している。

確かに多彩なカリキュラムがあり、いろんな子供が個性を伸ばせる仕組みが整っている点に関しては、非常に感心をしている。

しかし、問題はそこにたどり着くまでフォローが十分ではない点。制度は用意している

が、アプローチは本人あるいは保護者に委ねられており、運営側からのアプローチは見られない。多彩なカリキュラムを揃え「好きなものを選んでください」という形で多くの人を惹きつけているが、その後の支援やフォローがないので、卒業後どうなるのか不透明。

当該団体は、通信制大学も創設している。生徒がコミュニケーションや社会性、ソーシャルスキルを身につける機会をどんどん先延ばしにしているだけだと感じる。5年後、10年後にそのようなスキルを身につけていない子供たちが、大量に社会に出ていくことが懸念される。

(委員)

先程の発表を伺いながら、委員の「良心的に運営しているところほど経営が難しくなる」というご指摘は、非常に重要な論点だと感じた。公として何ができるのかを改めて考える必要がある。

現在、不登校児童生徒は、小・中・高を合わせると40万人を超えており、その内で良心的に運営しているところに通っている子どもは限られており、コスト面も含めて課題は大きい。その中で公立だからこそできる役割を考える必要がある。

先程の全国展開している団体であっても、全ての子供たちを救っているわけではない。もちろん個性・自分らしさを發揮し、いきいきしている子供はたくさんいるが、そこに行ってもうまくいかない・行けない子供をどう支援するかを考えないといけない。

また、子供たちが置かれている環境は大きく変化している。ICTの発達により教育の形もコミュニケーションの取り方も変わり、生成AIに相談する学生も増えている。

オンラインでの繋がりが中心となり、バーチャル空間だけで一生を完結してしまう可能性がある中で、「体験」「共同生活」という人間の基本的な営みをどう確保するのかが重要。

人数が少なくとも、子供たちが「生きるとはこういうことだ」と実感できる場を確保することが重要であり、そこでの学びを社会にどう発信し、活かしていくかを検討すべきだと感じた。

施設の意義や必要性について各委員から発表頂いたので、これらを踏まえ、ここからは全体的な議論をしたい。

施設の意義・必要性、また県が運営することの必要性について、今後どのように進めていくことが適切なのか、委員会として一定の方向性をまとめたい。各委員の考えを率直に示して頂き、様々な意見が交わされる中で、今後の方向性を見出したい。忌憚のないご意見を頂きたい。

(委員)

神出学園・山の学校の対象は16歳以上であり、不登校対策やフリースクールの議論を中心となる15歳以下とは考え方方が異なる。15歳以下のフリースクールに通う家庭については、今年度から保護者支援を含めた取組を進めており、各フリースクールも出席扱いとなるよう努力している。ただ、出席扱いの必要性は、義務教育段階では判断が難しい面もある。一方で、遠方に通う場合は出席扱いになることで定期券の学割が適用されるので、フ

リースクールには、出席したことを認めてほしいという思いが強い。

しかし、高校では出席しただけでは駄目で、履修と修得がある点で小中学校とは大きく異なる。そのため、不登校といつても 15 歳以下と 16 歳以上では前提が異なることを踏まえ、年齢に応じて考え方を整理していく必要があると考えている。

また、神出学園・山の学校の存在意義は、どれだけ入学者数が少なくとも間違いないある。5 年前の修了者アンケートでは、「通信制高校に行くために単位を取得したい」という目的で入学した生徒はほとんどいなかったが、だんだんニーズが変わってきたように思う。

山の学校では、県内全市町の教育委員会に向けて広報活動をされているが、入学者数は少ない。必要性はあるが、何が不足しているかについては、引き続き検討が必要である。

(委員)

営利目的ではないため、何人生徒を集められれば良いという目標の設定は難しい。しかしながら、コスト面を考えると、現在の生徒数では十分とは言えない。広報にも取り組み、これだけ良い活動・施設にもかかわらず生徒数が少ないとことについて意見を頂きたいたい。

(委員)

先ほどの繰り返しになるが、山の学校では、高卒資格の取得を目的としていない。高校に通い辛くなった生徒が山の学校に来て短期間過ごし、元の高校に返すという体制を構築したい。県立施設であるので、教育委員会において山の学校に在籍する期間を欠席扱いとしない、あるいはレポート等で代替できるような連携体制が整えば、より利用しやすくなると考える。

多くの保護者が山の学校に 1 年間通わせるよりも、広域通信制高校に入り高卒資格を取った方が良いと考える。しかし、短期的に山の学校を利用し、元気になれば元の学校へ帰るという仕組みが効果的だと考えるので、教育委員会には検討頂きたい。

これらは、高校生年代に限った話だが、山の学校は 23 歳までを対象にしているため、大学に行けていない子、広域通信制を卒業したが、社会に出られない子など生徒によって支援の方法は様々である。

(委員)

1 年間入学することに意味はあるが、1 ヶ月または 1 学期間に相当する 3 ヶ月の短期利用など柔軟にすれば、入学者数が増えるということによろしいか。

(委員)

現状でも高校に在籍しながら山の学校を利用することはできるが、その間は在籍校に出席していないため欠席扱いとなる。つまり、山の学校へ通っている期間が長いほど、欠席数が増え、やがて留年してしまう。山の学校に通っている期間について、在籍校で欠席扱いとしない仕組みができれば、より利用しやすくなるということ。

(委員)

山の学校では、随時入学ができるとのことだが、神出学園は随時入学できるのか。

(委員)

可能。定員に満たない場合は、4月以降、8月を除き10月まで追加募集をしている。今年も実際に10月に2名が入学した。

(委員)

神出学園・山の学校も10月まで随時入学でき、短期間での修了が可能である。こうした柔軟な活用のしやすさをアピールできれば良い。

また、委員が話された発達課題のやり直しは重要だと思う。神出学園・山の学校には発達段階が止まってしまった16歳以上、場合によっては成人している方も利用しており、

「育ち直し」が必要である。ICTやAIが社会で大きな役割を果たす時代だが、人間にしか身につけられない非認知能力は、生活体験やアナログな活動を通じて育むことができる。

多くの子供はICTと生活体験のバランスを取りながら成長しているが、育ちそびれた人々にとって山の学校や神出学園での生活体験は大きな意味を持つ。寮生活や自然体験などに意義があり、今日的な課題にも十分対応できる施設だと感じている。こうした点は、施設のアピールポイントの一つだと思う。

(委員)

フリースクールの制度については、本来国が教育的な観点から一定の配慮をすべき部分があるにも関わらず、多くを民間のフリースクールに委ねている。先ほど委員からも指摘があったように、良心的に運営しているフリースクール等ほど経営が厳しく、職員が自らの給与を運営費に充てて運営を続けている例もあると承知している。その点、神出学園・山の学校はしっかりととした教育プログラムのもとで運営されており、民間フリースクールが苦手とするカリキュラム面などについて、支援やフォローができるのではないかと感じた。業務が増える懸念はあるものの、利益を第一にせず子供のことを考えている良心的なフリースクールに対して、相談役として関わるなど、県立施設として補完的な役割を担うこともできるのではないか。心理士や看護師をはじめ専門スタッフが揃い、やる気のある教職員にも恵まれている施設であるからこそ、民間フリースクールが抱える課題に対して何らかのフォローができないかと感じた。

また、将来教員を目指す方や教員の方に実習の場としてもらうことで、課題の多い子供たちの対応力を身につけることができるのでないか。他にも、精神保健福祉士、公認心理師、臨床心理士などの実習の場としての役割も担うことができれば、県立施設としての意義は、子供への直接の支援だけでなく、民間フリースクールへの支援にも広がり、救える子供が増える可能性がある。今後の方向性として検討してもよいのではないかと感じている。

(委員)

民間の相談役ということについて、「山の学校に行きたいけど遠い」と言う相談を受け、今年度、県のひきこもり相談支援センターの淡路ブランチと連携して、その地域の不登校児童生徒を対象とした木工体験を現地で実施する予定である。また、教員の実習について、これは神出学園でもそうだが、県教育委員会と連携して初任者を対象とした教員研修等を実施している。

(委員)

継続的な投資や運営の意義について、生徒個人への支援にとどまらず、未来の社会基盤の維持のための投資でもあると考えている。本来こうした取組は、自治体や国が担うべきものである。財政負担の配慮は必要であるものの、前提として施設の運営形態は、入学生が増えても収入が増える仕組みではないことを考慮する必要がある。より多くの生徒を受け入れ、教育支援を広く届けていくこと自体が、教育効果につながるのではないかと感じている。

何人であれば相応の教育効果があると評価できるのか、内部での基準づくりも必要。学校では学級数による統廃合の基準があると思うが、神出学園として目指す入学生数の目安があれば、それに向けて入口・出口戦略が検討できる。

神出学園・山の学校は、進学の際に第一選択になりにくいという前提があるようだと思えるが、委員の意見も踏まえながら、できる範囲で入学者を増やす工夫を行う余地はあると感じた。

(委員)

施設を卒業し、無事に次のステップへ進めた人数こそが重要だと思う。2年の在籍が必要な生徒もいる一方で、3か月程度で次のステップに進める生徒もあり、それはそれで非常に良いこと。「2年間」や「卒業」にこだわらず回転をさせ、次のステップに進む生徒を一人でも多くすることが大事。

また、山の学校は外部との交流が多いが、神出学園は生徒の特性上、どちらかといえば閉じた環境にいることが多いと思う。外出手段が限られているのであれば、神出学園で地域の方々や同じような課題を抱える子供・大人が参加できるイベントを開催してはどうか。他にも、地域のボランティアの受け入れを増やすなど、門戸を開く取り組みを進めることで、認知も広まり、多くの方に施設の意義が伝えることができる。

(委員)

確かに神出学園は、閉じられた部分が多かった。安心できる環境を提供することを優先する方針で、効果を出してきた。利用者の拡大や認知を増やす観点から、来年度より、月に2回行っている一日自由体験の対象を、「不登校の中学生以上」から「神出学園に興味がある小学校高学年以上」に拡大する。

学園説明会も月2回、水曜日に定期開催し、実際の学園生の生活の様子を見学できる見学会を兼ねる形に変更する。これまで学園説明会は、心理的負担を減らすために、学園生が不在の金曜日に行っていった。しかし、それでは入学後のアンマッチに繋がりやすく、実

際の様子を見学したいという声もあったため変更する。

また、教育委員会の初任者研修や中堅研修で利用いただいている、臨床心理士も子ども家庭センターで講習を行うなどをこれまで行っていたが、さらに拡大していきたいと考えている。

私は、神出学園は、「道の駅」のような役割を果たす施設であると感じている。多くの子供は中学から高校へノンストップで進んでいくが、その途中でしんどさを抱え、少し休みたいという子供もいる。そうした子供が安心して立ち寄り、次のステップへ向かうための時間を確保できる場所として、神出学園・山の学校の存在は非常に重要である。

今は、新しく道ができ、おしゃれなカフェやインスタ映えする施設、いわゆる新しい仕組みやフリースクールなどの選択肢が多くあり、そこを目指すこともあっていいと思うが、しんどいと思っている子供や親に対して「公立の道の駅を出さなくなったので、別のところに行ってください」と民間に任せることは公立としてできない。公立として休んでいい場所を保障することは、県の大切な役割だと考える。

現在、52期生は卒業後の進路を考え始めており、保護者も不安を抱えている。学園生自身も進路に焦りを感じる中で、これがしたいと思えるような環境になっていることが大事。高卒資格を取ればよいという価値観ではない子供たちにも、選択肢の保障ができる場が必要だと考える。

(委員)

先程のシンポジウムの映像では、学園生活で一番喋ったのがカウンセリングの時間でしたとか、カウンセリングによってずいぶん救われましたっていう話が出ていた。今はカウンセリングとかカウンセラーという敷居が比較的低くなっているので、様々なところにカウンセリングルームや心療内科等が、また、少し性質は異なるが、例えば放課後デイサービス等、様々な施設があり、我々の運営していた学校はそういう各地のカウンセリングルームとか、診療内科、放課後デイサービスとの連携をとりながら、そこからの紹介を受けていた。

広報は十分されていると思うが、カウンセリングルームや心療内科にアプローチすると、ニーズを掘り起こすことができるのではと感じた。

(委員)

まとめのようになるが、結局、何が足りないのか、今できることは何かを考えると、これまで出てきた意見に戻る。体験ができること、寝食を共にする共同生活の場があること、ここで「育ち直し」ができること。当然コストはかかるけれど、教育的な意義は間違いないにある。

委員の意見を総括すると、施設が生き残っていくための案として、センター機能を持たせてはどうか。フリースクールや学びの多様化学校、校内サポートルームなど、様々な場があるが、宿泊を伴う体験ができるところは少ない。だから、1日でもいいからこういう体験ができると情報提供しつつ、実際に体験できる場を開いていく。もちろん、これまで神出学園は安心を守るために外部に対して閉じていた部分がある。しかし、安全を確保し

た上で、少しづつ外部に向けて開いていくことも必要だと思う。

それから、教員や公認心理士、カウンセリングの学びをしている人たちの実習の場として使ってもらうのも一つ。生きづらさを抱えている子たちへの対応を学ぶ場というふうに位置づけられないか。来る人にとって学びになるだけではなく、生徒にとっても様々な人と出会う経験になる。これは成長のきっかけにもなると思う。

そういう意味でいうと、小学生や中学生が自然体験に来て、学園生が案内役になる、そのことが勉強の場になるし、広報にも繋がる。学ぶ側にも教える側にもなる経験は、非常に大事である。

神出学園はステップアップの場であり、長くいる子もいれば短期間で次に進む子もある。その柔軟さがポイントだと思う。あとは、在籍中の出席扱いの話も出たが、そのような制度的な保障も必要だと感じている。

内閣府の調査では、15～64歳のひきこもりが146万人と言われている。もし、神出学園・山の学校のような場が、そのうちの毎年50人でも60人でも社会的自立につながる若者を送り出せるなら、それは大きな先行投資になるし、他県のモデルにもなり得る。民間のフリースクールは損失を出すことができない。教育は、儲けるためにやるものではない。公が儲けを目的としない場をきちんと持っていること自体に、教育的な意味があると思う。

(委員)

今までの議論を聞いていると、ひきこもり・不登校は全体的な目線で考えていかないといけないと思う。教育委員会として不登校対策プロジェクトがあるが、そこで神出学園・山の学校と一緒に取組んでいけるようなものはあるのか。

(委員)

教育委員会では、義務教育年齢を対象にしているため、対象年齢が16歳以上である神出学園・山の学校と何か一緒に取組むということは難しい。

(委員)

学びとは、教科書で知識を覚えるだけでなく、「生きることを学ぶ」「人とつながることを学ぶ」という意味もあると私は思う。高校の不登校については、もともと調査があったわけではなく、不登校が社会的自立につながりにくいという課題が明らかになり、ようやく調査が始まった。

義務教育を終えた若者に対して、どう社会的自立に向けた支援をしていくのかは本当に大きなテーマであり、難しいが、やる価値はあると思う。

だからこそもっと活用しやすい形を考え、施設の意義を発信し、足りない部分があるなら補い、さらにはこちらから働きかけることも大切だと感じた。

(終了)